

(4) ふたりの級友

このように、町の子どもたちと交われなかった加藤だが、記憶に残って加藤のその後に影響を与えた子がいないわけではなかった。

ひとは大工の息子だった。その子は教室では加藤と同等の学力をもっていたが、家に帰れば子守をはじめ家事の手伝いをしなければならなかった。加藤は好きなだけの時間を勉強に費やすことができた。「教室での彼との競争が、まったく条件のちがう競争であったということを理解し」自分の置かれた社会的位置について「ほとんど後ろめたさ」を感じた。そしてこの大工の子が、家庭の経済状況によって中学進学をあきらめざるを得なかったことに強い驚きを感じ、疑問を抱いた。中学に進学できないのは、その子の責任でもなく、その親の責任でもない。教育の不平等は、個人の責任ではなく、社会の責任であるという考え方をもったのである。

もうひとりの男の子がいる。この子は「教室のなかではいつも出来がわるく、教師から怒鳴られてばかりいた」。ところがこの子が、家業の手伝いで、道玄坂の夜店で見せた振る舞いに加藤は圧倒される。「父が氷の代を払い、その子がうけとる」。父信一とその子のあいだに対等な取引があるにかかわらず、「私は単にそれを見ているにすぎない」。加藤は級友を「再発見」し、自分を「再発見」する。ここでも加藤は「社会」を知るのである。(写真：昭和初期の道玄坂界限)



大工の子と夜店を手伝う子の存在は、長井邸の金網や熊六邸の生籬と同じように、社会と
いうものを教えたに違いない。加藤が信奉した平等主義、社会的弱者への共感、こういう
経験にも根差しているに違いない。もし加藤が町の小学校に通わなかったら、平等主義や社
会的弱者への共感、もつことがなかったか、あるいはもつことがかなり遅れたらろう。